【自在連句】 について

- 連句は、長句（五七五）と短句（七七）を連ねていったものです。

- 短歌（五七五七七）とは別のもので、長句も短句も、それぞれ独立したもので、しかも、詩になっていないといけません。
  美しい、魅力的なことばを選んで、表現していきます。

- 前句（まえく）に触発されて、つかず、はなれず、ふん囲気を継続して、詠んでいきます。
  ［物付（づけ）・心付・匂付（においづけ）］
  どう、すすんでいくことやら？

- 連句の形は、いろいろありますが、詩的緊張度の高い〈歌仙〉形式（３６句）で、表現していくことにします。

- 従来の連句の原則や規則［「三物」（みつもの）・「月や花の定座」（じょうざ）「去嫌い」（さりぎらい）など］に、いっさいしばられないで、知的に楽しみながら、時間をかけて、詠んでいきます。

- 発句（ほっく・当季を詠む）、及び３５句めの「花の定座」の句、挙句（あげく）は、特に大事に作句します。
  無季は〈雑〉（ぞう）の句と呼んでいます。

- 独吟・両吟・三吟・・・連句は、一人で詠むのもよし、複数で詠んでいくのも楽しいものですが、その場合、短句と、続く長句は、同一人が詠むのがよいと思います。
  連なりがよくなって、流れが出てきます。

巻一　　自在歌仙　　## なでしこの歌

蝉しぐれ　雲の流れてゆく果てに

　　モーツアルトの　Adagio の曲

今なにを　考えている？と　妻の問い

　　繚乱百花の　天主堂あり

午後大雨洪水警報　発令中

　　尽きぬよろこび　「右近研究」

「対馬丸」観て戦争を　語る児ら

　　人はゆっくり　向かうわが家へ

山蜻蛉（とんぼ）　いるところには　こんなにも

　　９９年９月９日

月の夜　駈ける小犬と　子どもたち

　　手が出てしまう　甘き物どち

花見頃　しばらく行けぬ　吉野山

　　がんばらぬよう　あわてぬように

ザビエルの　昔伝えし　キリスト教

　　宵待草の　いまだ咲き継ぐ

天高し　地に殺戮（さつりく）の　なき日なし

　　右近残せし　なでしこの歌

創造の　味を忘れし　売りトマト

　　ハモニカで吹く　若き日の歌

生かされてきた人たちや　敬老日

　　今日は安息　礼拝する日

秋草を　種々に持ち来て　野となりぬ

　　思い伝えて　南蛮ギセル

かすかなる　細き声聴く　聖地かな

　　右近に学ぶ人　遠近（おちこち）に

コスモスに　人は憩いて　祈る時

　　切れることなく　虫の歌声

気に入りの　黒楽茶碗　「キリストさま」

　　宗麟・臼杵（うすき）　慕わしき町

いよよ子の　結婚話　梨をむく

　　七草訪ね　二人行く道

あと三年（みとせ）　世の旅人の　すべきこと

　　「ヨボ」と呼べるは　韓国土産

花吹雪　シテの聖徒を　彩りぬ

　　右近とガラシア　いつか御国（みくに）で

巻二　自在歌仙

紅　葉　道

秋日和　天に自在の　水彩画

　　親子何やら　語りつつ行く

「愛の夢」　生まれ紡がれ　満たされて

　　日本最古の　ロザリオ優し

タイタニック　組み立てていく　運動会

　　不登校いつ　さやけき朝に

川の辺に　ともにいただく　古都の秋

　　名画の少女　ピアノ晴れやか

白くまの　すべて忘れし　眠りかな

　　右近のこころ　抹茶を点てて

大いなる　生死のわざを　終えにけり
（※ 1999.10.12　三浦綾子姉　召天）
　　秋雷去りし　あとの夕焼け

明月や　雲の大河を　遡る（さかのぼる）

　　重き試練に　脱出の道

珍しく　紫式部　娘（こ）の土産

　　お金かからぬ　趣味また楽し

花の道　いまは紅葉の　色づきぬ

　　早天祈祷　半月動く

右近像　空いちめんの　いわし雲

　　涙の電話　切る時はなく

月の夜　あとは生きものたちのもの

　　おばけ屋敷の　好きな児童（こども）等

天の海　白線画き（えがき）　飛機進む

　　鳥語（とりご）わからず　囀り（さえずり）続く

禁教下　利休七哲　右近の名

　　夕陽に黄なる　銀杏かがよふ

焼き上がる　縄文土器に　秋陽濃し

　　御出世以来　嗚呼（あゝ）二千年

晴れわたり　さまざまな赤　紅葉道

　　夜景の町の　くらし聞こえず

秋の夜や　もう導犬も　いる舞台

　　導く星か　夜明けの前に

落葉掃き　夏の日陰の　お礼です

　　十字かがやく　阿武山の空

過ぎし日の　聖徒あふれし　花の城

　　右近に学び　今の世を生く

巻三　　自在歌仙

風におされて

月照らす　祈りの家に　続く道

　　救いの前の　殺意の話

アフリカの　音に心が　踊り出す

　　南蛮渡来　生命ささげて

天高く　まだ見ぬ故郷　右近像

　　亡き母慕い　あふれる言葉

湯舟より　見える紅葉の　深まりぬ

　　風に押されて　坂のぼりゆく

描き留めむ　残るなでしこ　いつまでも

　　思わぬ人と　思わぬ場所で

秋日和　歯痛の妻は　元気なく

　　道路をふさぐ　車よけつつ

幽囚の　二十四年よ　里の秋

　　保母と呼ばれる　若い母達

旅近し　風邪ひかぬよう　忘れぬよう

　　障害者来て　売る秋野菜

夕紅葉　心の痛むこと　今日も

　　ガラシアの和歌を　をんなの筆で

「利家とまつ」と　右近の　國の秋

今日もしぐれか　雲流れゆく

おいしいね　うれしい　ごめん　ありがとう

「シャローム」の歌　声を合わせて

その場所に　立って初めて　わかること

ふだんの如く　電話の妻と

夜どおしの　雷鳴　目覚めて　雪景色

輝く太陽　加賀に届けむ

加越能の　秋を右近と　共に行く

声掛けくれる　迷う羊に

妻誘ふ　月の光の　うたふ中

大紅葉（だいこうよう）と　言うに他なし

南坊（みなみのぼう）　昨日宮古（みやこ）を　立たれけり

事情は知らず　陰口を聞く

風の子等と　真剣勝負　じゃんけんほい

紅葉（もみじ）していく　丘の教会

かろやかに　吉野の桜　散りゆけり

終わりの時は　感謝あふれて

巻四　自在歌仙　　**け　れ　ど**

鈴虫の声続く道　教会へ

　　秋夜（しゅうや）更けゆく　大事な話

涙（ナダ）そうそう　会いたくて　この高き天

　　梨は甘くて　葡萄は香る

蚊の夕べ　追えど払えど　打つ手なし

　　育てしゴウヤ　分かつ幸い

名月の　郡家新町（ぐんげしんまち）　右近之地

　　きょうの便りに　きょうの返信

９・１１　世界の祈りの　レクイエム

　　元気なうちに　その日の備え

燈下親し　いまも　純愛物語

　　ふと口ずさむ　霧の摩周湖

秋雨に　赤いポストの　濡れており

　　少し風邪気味　冬瓜（とうがん）おいしい

赤とんぼ　とまっているよ　右近像

　　秋の池見て　語らふ母子

コスモスの丘へ　わたしは蝶になる

　　花見る人も　美しくあれ

けれど（使徒信条）覚え　唱えつつ行く　月の道

　　右近仰ぎし　高槻の月

人気の理由　考えてみる　夜長かな

　　庭草伸びて　プロにおまかせ

葡萄食べる　孫見て　嫁見て　妻を見て

　　雨傘の上（え）に　落ち葉ひとひら

雪の日の　拉致前の横田めぐみさん

　　こみ上げてくる涙を　祈りに

台風の近づく今朝の　青い空

　　行き先違う　車混み合ふ

天国で挨拶　右近　ガラシアさん

　　どれもすてきな　クリスマス曲

野分去り　口短調ミサ　しみ通る

　　待つとはなしに　まだ来ぬ便り

敬老日　夫婦で祝う　ショートケーキ

　　いい感じよね　虫の歌声

妻と主と　三つ撚りの糸　花ごろも

　　いましばらくは　妻よ　よろしく

巻五　自在歌仙　花（はな）　篝（かがり）

天高し　はるかな旅に　出かけたい

　　風に押されて　風車（かざぐるま）みち

半袖にしようか　今日の　秋日和

　　仮寝するにも　パジャマに着替えて

愛こめて　ニュージーランドへ　秋便り

　　大失態に　笑ふほかなし

音たてて　秋の七草　刈られゆく

　　「数独」友に　秋の夜半まで

雲少し　ほしいくらいの　青い空

　　妻の造りし　栗の甘露煮

秋コート　色決めかねて　尋ねくる

　　新米届き　ごはんおかわり！

人眠る　夜半に起きれば　月が友

　　「かわいい妻に　旅をさせよ」とや

病む友へ　便りと祈り　秋星座

　　おんぶばったの　休む白壁

わが右近研究室の　祈りの座

　　買い物かごに　秋果あふれて

たっぷりと　干した蒲団で　見る夢は

　　保育園みち　秋のたんぽぽ

わが前に　桜のひと葉　散りにけり

　　犬猫愛する　心はなくて

秋夕日　足のなが～い　影おじさん

　　犬の置き物　こちら見ている

厳粛な時　近づけり　秋桜

　　いよいよ高く　天晴れわたる

白妙の　うつ向いて咲く　曼陀羅華（まんだらげ）

　　ほどよく　いわしの　南蛮漬

自転車を　降りて　川面に月　の道

　　おいしい秋の　まいたけ御飯

仲秋の　アンダンティーノ　「鱒」を聴く

　　声かけられし　なつかしい声

神無月　教会無牧　インマヌエル

　　拾いて遺す　秋の風景

主と右近　輝く民ら　花篝（はなかがり）

　　天の御国で　ささげる礼拝